

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 福田武史

本論文「訓読される『日本書紀』——「倭訓」の創出による『日本書紀』の変換——」は、元来漢文として書かれ、漢文として読まれた『日本書紀』が、平安時代における講書では訓読されるものとなったことを、『日本書紀』の変換としてとらえようとしたものである。

平安時代には、九世紀初から十世紀後半まで、六度におよぶ『日本書紀』の講書が朝廷主宰のもとにおこなわれた。講書では、徹底して和語で読むことがなされた。それは、漢文テキストの訳読ではなく、テキストの背後にあった固有のことば（和語）をもとめる営みであったととらえられる。漢文として発想されたものだから、和語をもととしたものではありえないが、あったはずのものとして和語を創り出すのである。その和語（講書では「倭訓」と呼んでいる）をテキストのもとにあったものだと、いわば倒立させてしまう。そうした和語化をテキストの本質的変換としてとらえるのが、本論文の主題である。

本論文は、序章「はじめに」、第一章「日本書紀講書という場」、第二章「「倭訓」の物語としての『日本書紀』」、第三章「古語の相伝という制度—「先師説」をめぐる」、第四章「「古語」の創出」、終章「おわりに」から成る。講書の場を具体的に展望しつつ（第一章）、そこにおいて和語で読むことの制度化を認め（第二、三章）、その意味にせまる（第四章）という論の構成である。

まず、序章では、漢文として書かれ、読まれた『日本書紀』が訓読されるということを経典の根本的な変換として見るべき問題としてたしかめる。そして、その変換の現場として講書を見ることにむかうのであるが、第一章は、「日本書紀私記」をつうじて、講書の場を概観し、そこで何が論議されたかを「私記」を読み解いて示してゆくなかで、講書において一貫していたのは、全体を徹底して和語化することであったということを明確にする。

第二章は、その訓読の論議にたちいり、それが、『日本書紀』の語句の字義や文脈理解から離れたものとなっていることをあきらかにした。かれらが「倭訓」ないし「倭語之訓」というのは、『古事記』の仮名書き表現に見出したものであり、それを『日本書紀』のどこにあてはめるかを論議するのであったという。第三章では、そうした読みがどのように根拠づけられていたかをめぐって考察し、代々の講書をつうじて博士たちの読みが伝えられてきたという理由で権威化されるのであったと見届けられる。「私記」のテキストに即して丁寧を読み解く態度を徹底することによって、それは果たされる。

第四章では、その訓が自分たちの固有のことばであったとして、「古語」として意味づけ

られたことを見る。『日本書紀』は「古語」の書として根拠づけられ、その訓は、歌学書などで、自分たちの固有のことばをあらわしたものとして尊重されることをたしかめるのである。終章は、訓読の制度化が現在にまでおよんでいることを、わたしたちの問題としてふりかえる。

本論文の意義は、第一に、講書における和語化が、『日本書紀』のテキストの変換であったことを明確にしたことにある。「日本書紀私記」を読み解くことをつうじて講書の現場をうかびあがらせ、その本質をあきらかにしたのである。「私記」に即して、論証は実証的に綿密で、叙述は説得的である。本論文ほど丁寧に「日本書紀私記」を読み解いたものは従来ないのであり、その努力は高く評価される。また、『日本書紀』テキストの変換という視点は斬新で、『日本書紀』研究に新たな問題を投げかけるものとして評価される。『日本書紀』を、歴史のなかで変換されつつ生きてゆくテキストとして見ることは、今後の研究にとって必須の視点となるであろう。さらに、それが、当たり前のように訓読文をならべて『日本書紀』を読むということそのものを問い返し、現在の研究の立場の根幹のふりかえりをせまるものであることも、見落とすことはできない。本論文は、そうした諸点においておおきな意義があると評価される。

ただ、平安時代の講書にしぼったことの明快さとうらはらであるが、中世・近世について展望にとどまったことに物足りなさがのこること、また、論述において、用語（述語）のゆれが見られ、安定を欠くところがあることなどの指摘もあった。しかし、それらは本論文の価値をそこなうものではないというのが審査委員の一致した評価であった。

したがって、審査委員会は全員一致して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。